

剣道書における「武士道」の研究
—明治期から昭和初期に着目して—

**A study on bushido in books on kendo :
With a focus on the Meiji to the early Showa period**

久保 優樹, 武井 幸二, 岸本 卓也

Yuki KUBO, Koji TAKEI and Takuya KISHIMOTO

Abstract

The current study has discerned part of the mindset of early modern kendo and it then focuses on when and in what sense the term bushido [the way of the samurai] began to be used as a representation of that mindset in books on kendo from the Meiji to the early Showa period. The term bushido as was used in books on kendo appeared in the Meiji period, when the public called for bushido as a result of victories in the Sino-Japanese and Russo-Japanese wars. The term was first used in 1895 in Kumamoto Sanemichi's Manual of Martial Arts. Passed down from one's forebears, bushido referred to bravery and integrity. This mindset of the warrior was described in close relationship to kendo, as is apparent in the belief that bushido was the essence of kendo.

In the Taisho period, bushido was described as a uniquely Japanese mindset. Upon the advent of the Showa period, bushido became the national spirit or national ethic and was referred to as loyalty and patriotism. In line with the surge of events at the time, i.e. World War II during the early Showa period, the definition of bushido in books on kendo and the term itself changed. In other words, the term no longer referred to the original spirit or virtues of bushido. Instead, it was defined to fit the times and used to mean a nationalistic mindset. The meaning of bushido found in books on kendo has changed with the times. However, the term has been consistently viewed as a mindset cultivated through the practice of kendo. Perhaps kendo values that mindset because of bushido. The samurai class sought to develop a unique mindset through fighting in a certain era. Although that mindset changed in early modern kendo, it is still needed, as this study has revealed.

Key words; bushido, national spirit, loyalty and patriotism

I. はじめに

剣道は、闘争の技術から生まれ時代の変遷とともに大きな変化を遂げてきた。本来は、人を殺傷する技法として生まれた「術」であった剣術が、江戸時代に入り争いのない平和な世の中となり、芸道的な要素を高め「道」として自己を高める新たな価値を見出し昇華してきた。近代に入り、剣術は衰退する中で榊原鍵吉の撃剣興行や関重郎治による成課編入運動などにより学校教育に取り入れられるなどし、変化しながらも脈々と受け継がれてきた。

現代において「剣道とは何か」について全日本剣道連盟（以下全剣連）は、以下のように説明している¹⁾。

「剣道」とは、日本の武士が剣（日本刀）を使った戦いを通じ、剣の理法を自得するために歩む道を指し、剣道を学ぶということは、この剣の理法を学ぶことを意味します。敢えて言えば、剣の理法の奥にある武士の精神を学ぶことが重要で、剣の操法を厳しい稽古を通じて学ぶことは、その為の一つの手段と見られています。これが剣道の目的が「人間形成の道」と言われる理由です

全剣連は、剣道を通じて「剣の理法」の奥にある「武士の精神」を学ぶことであると説明している。井上は、剣道について「精神陶冶を重視」し「正義を尊び廉恥を重んじ礼節を重んずる、剣道的特性を無視忘却しては、剣道の存在価値はゼロ」²⁾であると述べている。

剣道においては、技を学ぶことのみならず、稽古を通じて精神性を学ぶことが重視されていると言えよう。その精神性の根幹にあるのは、全剣連も述べているように武士の精神から大きな影響を受けた。そこで、本研究では剣道の精神性の一端を捉える試みとして武士によって形成された精神性を示す「武士道」に着目したい。近代剣道の原

型をつくった明治期から昭和初期の剣道書において精神性を強調する「武士道」は、いつ頃から使われ、どのような意味として用いられてきたのかについて明らかにする。

II. 「武士道」の登場（明治期）

剣道書における「武士道」が初めて登場するのは、明治28年限元実道の『武道教範』においてである。隈元は西南戦争で抜刀隊を率い活躍した人物である。そこでは「祖先の遺伝としては武士道たり。武士道は大いに武勇を尚び、特に節操を重んじ、至誠をもって士の士たる本文を尽くすものこれなり」³⁾と述べている。隈元は「武士道」とは祖先から受け継がれてきたものであり、勇ましく、信念をもち、誠実な人でなければならないという意味で用いている。さらに、剣道の本質は「武士道」にあるとし「廉恥節操自信自重義勇公正忍勉等と名づくる中心所愛の高尚なる地位に進むものがある」⁴⁾と述べ、こういった徳目を挙げている。

剣道書に「武士道」が登場するこの時期は、「武士道」が我が国において広く使われ出した同時期でもある。菅野は「武士道という言葉が一般に広く知られるようになったのは、明治中期以降のことであり、日清・日露という対外戦争と相前後して、軍人や言論界の中から、盛んに『武士道』の復興を叫ぶ議論が登場してくる」⁵⁾と述べている。我が国は、対外戦争の勝利によってナショナリズムが高揚し、その勝利の要因を武士の精神に求め「武士道」が、広く使われるきっかけとなったのだろう。このことから、剣道書において、特別に「武士道」が用いられ精神性が強調されたわけではない。対外的な戦争の勝利という時代背景から剣道書にも「武士道」が登場し、精神性が述べられるようになったことがわかる。

剣道書における「武士道」の特徴は、剣道を稽古することによって「武士道」の精神性を養えたとされたことである。明治28年小澤卯之助の『武

道改良教授武術體操論』では「武士道ノ教育ヲ施サレテ士氣ヲ鼓舞シ國家ノ元氣ヲ作興スルヲ得ベキ武士道教育ハ武道ニ頼ラザレバ」⁶⁾と述べ、武道によって武士道教育をし、国家の士気を高め盛んにしていくことが述べられている。明治29年橋本新太郎『新案撃剣體操法全』では、「武士道ヲ修メ大和魂ヲ發揮センニハ武道ヲ講ゼザルベカラス」とし「武士道ハ武勇ヲ尚ビ、節操ヲ重シ、廉耻ヲ勵ミ、至誠以テ其ノ本分ヲ盡ス」⁷⁾とされ、武道によってこういった徳目を養うことができると考えられていた。

Ⅲ. 我が国固有の精神として強調された大正期

大正期の剣道書にみる「武士道」は、先述したように日露戦争勝利が大きく影響している。上田頼三『剣術落葉集第一巻』では、「日露ノ役ニ於テハ器械及兵力ニ至テハ露國ニ及ハサリシモ連戦連捷ノ譽ヲ列國ニ輝シタルハ何ソ是レ上ハ司令官ヨリ下ハ一兵卒ニ至ルマテ此武士道ノ精神ニ統治」⁸⁾されているというように、日露戦争勝利は兵器に劣った我が国が武士道精神によって統治され勝利したことが述べられた。また「武士道」は我が国固有として捉えられ「武士道ノ精神ハ我國獨特ノ精神ニシテ特殊ノ國ノ心」⁹⁾とされた。大正11年の堀田捨次郎著『圖解剣道教範』では、剣道の教育目的について「我國古來の武士道を發揚し健全な國力の増進を企圖せしむる」¹⁰⁾とされ、我が国古來の精神性として捉えられている。さらに大正5年の千葉長著作『國民剣道教範』では、国家の独立と発展について「國民の強壯なる體力と、健剛なる精神」は、「日本固有の武術と武士道とを以て、暫くも之れが修練を怠らなかつた」¹¹⁾ことにあると述べている。つまり、我が国固有の精神である「武士道」は、武道によって養われたことが述べられた。大正9年の武部兵吉郎著『剣術極意秘傳』では、「我國固有の武士道は我立國の基礎」とし「我國獨特の武術を以て國民の身心を陶冶」¹²⁾することが述べられている。

大正12年の中山博道著『剣道手引草』でも、「武技の中には、嚴然として武士道が保有せられて居るのである。故に武士道即ち武道は、日本民族特有の道德」¹³⁾と述べている。このように「武士道」は、我が国の特有の精神であり、特有の道德を有しているということが盛んに言われた。

では、剣道は「武士道」との関係性については、どのように捉えられていたのであろうか。大正14年の富永堅吾著『最も實的な學生剣道の粹』で剣道の意義として以下のように述べている¹⁴⁾。

剣道は刀劍又は木刀や竹刀を以て、自己を護り、敵を制する方法を講ずる術であると同時に、身體を鍛ひ、精神を練り、武士道的人格を養ふの道であつて、殊に道義的の意味が深長なのである。これが一般の運動諸競技に比べて、大きな意義があるところである

このような関係性を剣道と「武士道」に見出し、精神性が強調された。また、ここから考えられることは、剣道は他の運動種目との違いを「武士道」という精神性によって、我が国の独自性を強調するねらいがあったのだろう。

Ⅳ. 国民精神と忠君愛国としての昭和初期

昭和期初期の剣道書における「武士道」の特徴として、国民精神や国民道德として語られ忠君愛国が叫ばれた。これまで「武士道」は、我が国固有の精神として道德などが述べられた。しかし、昭和初期には国民精神と同じ意味として用いられるようになり、一層国家との関係で精神性が述べられるようになった。なぜこのように国民精神として「武士道」が述べられるようになったのであろうか。それには、昭和初期の満州事変から日中戦争、太平洋戦争まで続く戦争が大きく関係していた。我が国は、これまで経験したことのない長期的な戦争へと突き進み、その下で国民精神や忠君愛国などが叫ばれるようになっていく。

「武士道」は、それまで道徳として述べられていた。しかし、この時期には国家主義的な要素を強め主張されるようになっていく。「武士道」の主君に対する忠義や忠誠心をうまく応用し、国民精神という名の下に国民の統一を図ろうと考えられたのだろう。また、「武士道」が強調された他の理由として、昭和6年に武道が学校教育において必修化されたことも考えられる。武道は、これまで必修になるべく明治期から関重郎治などが中心になり、正課編入運動などが行われてきた。それでも、武道は学校教育において必修として、取り入れられなかった。しかし、戦争という背景により、昭和20年の終戦まで急速な勢いで学校教育に武道が取り入れられた。その中で、他の種目などとの違いについて武道の精神性が強調された。武道の稽古によって「武士道」や「武道精神」を養成することが強調され、強い国民を育てることが目標にされた。そうしたことで、他の種目との精神性の違いが主張され、これまでにない勢いで学校教育の中に取り入れられていった。

では、「武士道」と国民精神の関係は、どのように述べられていたのだろうか。昭和6年の高野佐三郎著『剣道教本下巻』には「國民の心に深く根ざしてゐる忠君の至誠こそ、實に我が國民精神の根幹であり、我が武士道の神髓である」¹⁵⁾とされ忠君こそが国民精神であり「武士道」の根幹であると述べられている。昭和12年齊村五郎、金子近二共著『新制剣道教科書』では、「武士道とは、我が國建國以来の傳統的精神が発現したものである」¹⁶⁾とし、その「傳統的精神とは、我が國上古の建國思想が、時代の推移に伴なつて精錬され、一筋に傳へられた大國家的血族のゆるぎなき國民精神である」¹⁷⁾と述べている。小川金之助著『最新剣道教本』では、剣道と武士道との関係という項目では、「我々國民精神の精華である大和魂、即ち武士道の精神は、古來我々國民の血潮に奔流した特質で」¹⁸⁾あると述べている。『學校劍道』では、剣道と武士道の関係について以下のように述べている¹⁹⁾。

劍道は心身を鍛錬する道であると共に、國民精神・國民道徳の眞髓を傳へ、又それを鍛錬する修行法であることを深く留意し此の趣旨を遵奉することに専心努力することが劍道修行者の忽にすべからざる心得である

このように「武士道」は国民精神そのもののよう主張され、同質なものとして語られた。その背景には、国を挙げ戦時体制へと突き進み戦局が厳しくなるにつれ精神性が強調されたからであろう。

この時代の「武士道」では、忠君愛国が強調されることも特徴である。高野は、「武士道の神髓ともいふべきは忠君の精神である」²⁰⁾と述べている。昭和9年谷田左一著『剣道神髓と指導法詳説』では、剣道と武士道の項目において「武士道の本領はかく忠君愛國」であるとし「武士道は我が國民精神の顯現である。武士道の根本は武勇を尊ぶ精神であつて、主義方針は忠君愛國で、之が爲めには己の身命をも惜しまずに武勇を現はさうとするもので、これが武士道の本領」²¹⁾であると述べている。

昭和初期の戦時体制下では、「武士道」は国民精神として主張された。また、忠君愛国が叫ばれ、挙国一致が目指されたのであった。

V. ま と め

近代剣道書における「武士道」は、日清・日露戦争の勝利によって世間で「武士道」が叫ばれた同時期に登場する。初めて「武士道」が使われたのは、明治28年限元実道『武道教範』からであった。そこでは、祖先から受け継がれてきた「武士道」は、勇ましく誠実であることなどが述べられた。剣道の本質は、「武士道」にあるということからもわかるように、剣道との密接な関係として精神性が述べられた。

大正期では、我が國固有の精神性として語られ、昭和期に入り「武士道」は国民精神や国民道徳と

なり忠君愛国が叫ばれた。これらは、昭和初期の第二次世界大戦という時代の大きな流れに沿う形で、剣道書のみならず「武士道」は時代に即して語られた。つまりそこでは、本来の「武士道」の精神性や徳目ではなく、時代に沿った都合のよい形で国家主義的な精神性として使われた。

このように剣道書にみる「武士道」の特徴としては、時代によって変遷している。しかし、一貫して言えることは、剣道の修行によって養成される精神性として考えられていたことであろう。剣道が、精神性を重要視するのは、「武士道」との繋がりから考えることができる。武士が、一時代において戦いから得た独自の精神性を近代の剣道でも形を変えながらも求めようとしていたことが明らかになった。

今後の検討課題として、昭和初期の学校において武道は急速な勢いで必修化されていく。そうした中で精神性を語る言葉は「武士道」よりも「武道精神」が多く使われるようになっていく。なぜ「武道精神」という用語が使われるようになったのか、どういったことが主張されてたのかについて今後の検討課題としたい。

注記及び引用参考文献

- 1) 全日本剣道連盟, 全剣連の見解「剣道とは何か」, <https://www.kendo.or.jp/knowledge/kendo-origin/>.
- 2) 井上正孝「なぜ『武道』ではいけないのか」, 『新体育』49巻10号, 新体育社, pp.16-17, 1979.
- 3) 隈元実道『武道教範』, 『近代剣道名著大系・第一巻』, 同朋舎出版, p.115, 1985.
- 4) 注3) に同じ, p.131.
- 5) 菅野覚明『武士道の逆襲』, 講談社, p.13, 2004.
- 6) 小澤卯之助『武道改良教授武術體操論』, 小林仙鶴堂, p.106, 1896.
- 7) 橋本新太郎『新案撃剣體操法全』, 東洋堂, p.1, 1896.
- 8) 上田頼三『剣術落葉集第一巻』, 軍需商會, p.43, 1912.
- 9) 注8) に同じ, p.1.
- 10) 堀田捨次郎『圖解剣道教範』, 二松堂書店, p.1, 1922.
- 11) 千葉長作『國民剣道教範』, 富田文陽堂, p.1, 1916.
- 12) 武部兵吉郎『剣術極意秘傳』, 帝國尚武會, p.1, 1920.
- 13) 中山博道『剣道手引草』, 有信館本部出版部, p.33, 1923.
- 14) 富永堅吾『最も實的な學生剣道の粹』, 慶文堂書店, pp.3-4, 1925.
- 15) 高野佐三郎『剣道教本下巻』, 三省堂, p.3, 1931.
- 16) 齊村五郎、金子近二『新制剣道教科書』, 精文館, p.175, 1937.
- 17) 注16) に同じ
- 18) 小川金之助『最新剣道教本』, 星野書店, p.9, 1931.
- 19) 富山縣學校武道研究會『學校剣道』, 安倍印刷所, p.143, 1938.
- 20) 注15) に同じ, p.8.
- 21) 谷田左一『剣道神髓と指導法詳説』, 秋文堂書店, p.69, 1934.